

教皇 アフリカ 4カ国歴訪 戦争、独裁、搾取を非難し 共に祈る



4月19日、アンゴラのママ・ムシマ(心の母)教会で、3万人を超える人々とロザリオの祈りをささげる教皇レオ14世(OSV)



4月22日、赤道ギニアのバタ・スタジアムで、家族と青年たちとの集いに参加し、人々の歓迎に応える教皇レオ14世(OSV)



4月16日、カメルーンのパメンダに到着した教皇レオ14世を歓迎する人々(CNS)



4月14日、アルジェリアのアンナバにある「貧しい人の小さな姉妹会」が運営する高齢者施設を訪問し、利用者から絵を贈られる教皇レオ14世(OSV)

国際

- 教皇、アフリカ4カ国歴訪 1・2面
- 教皇、就任から1年 対話、平和、尊厳 一貫して求める 3面
- 教皇、ポンペイとナポリ訪問 教皇職の上にマリアの保護を願う 3面
- 聖地でキリスト者への暴力広がる 4面
- ホルムズ海峡の船員のため 船員司牧指導者ら、祈りを要請 4面
- 核軍縮の枠組み「瀕死の状態」日米5人の司教が声明 5面
- その他の国際記事 5面

国内

- いのち・平和・人権委員会 委員長声明/メールマガジン配信ほか 6面
- 沖縄から平和憲法を考える/超教派で憲法フェス 7面
- その他の国内記事 7・8面

- 主日の福音解説 9・10面
- シグニス・ジャパン50周年記念ミサ 11面
- 短歌・俳句・きょうをささげる(6月の祈り) 11面
- 訃報・告知板・番組 12面

オンラインで日々ニュースを配信している「カトリックジャパンニュース」のダイジェスト紙、月刊「カトリックジャパンダイジェスト」をお届け致します。本紙は無料です。

カトリックジャパンニュース 



カトリックジャパンダイジェスト 第14号
発行=カトリック中央協議会広報部
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館
電話(03)5632-4435 FAX(03)5632-7030

国際

教皇、アフリカ4カ国歴訪

教皇のアフリカ歴訪中の記事は、移動中の機内の出来事も含め16本がオンライン上に掲載されています。



4月13日、アルジェリアのアルジェにある「アフリカの聖母大聖堂」でカトリック信者たちと会い、共に祈る教皇 (OSV)

アルジェリア

【アンナバ(アルジェリア) 4月14日OSV】教皇レオ14世は4月14日、約1600年前に聖アウグスティヌスが逝去した場所の近くに建てられた聖堂でミサを司式し、この聖人の足跡をたどる深い個人的な巡礼の時も持った。

「まさにここで殉教者たちは祈り、聖アウグスティヌスは信者たちを愛し、熱心に真理を探し求め、熱意ある信仰で、キリストに仕えました」と教皇はフランス語でのミサ説教で語った。アルジェリアのカトリック共同体は、人口の99%がイスラム教徒という環境にもかかわらず、聖アウグスティヌスの信仰の遺産を受け継いでいる。



4月15日、ヤウンデにある児童養護施設で教皇を歓迎する人々 (CNS)

カメルーン

【ヤウンデ (カメルーン) 4月15日OSV】教皇レオ14世は4月15日、分離主義者による暴力に何年も苦しんできたカメルーンに到着し、力強い平和への訴えを行った。教皇を歓迎する何千もの人々が首都ヤウンデの沿道に並ぶ中、教皇は同国の指導者たちに「正義に対する飢えと渇きがこんなにもあるのです」と強調した。教皇はヤウンデにある大統領宮殿で、行政当局に、カメルーンには「対話ときょうだい愛と平和の奉仕者として」来たと述べ、2017年から北西部と南西部で続く武力衝突による「深い苦しみ」があることにも言及した。「いのちが奪われ、家族は家を失い、子どもたちは学校に行けず、青年たちは将来を見通せないでいます」と教皇は、同国大統領のいる席で語った。大統領は93歳の独裁的指導者で、40年以上も同国を支配している。



4月19日、アンゴラのママ・ムシマ教会に向かう教皇を歓迎する数万人の人々。その多くは2~3日前から野営して教皇を待っていた (CNS)

アンゴラ

【ムシマ (アンゴラ) 4月19日OSV】教皇レオ14世は4月19日、アフリカ南部で最も巡礼者が多いカトリック教会で、数万人の信者たちとロザリオを唱えた。教皇は首都ルアンダ近郊のキランバで10万人規模の朝ミサを司式した後、ヘリコプターで、クアンザ川の岸边にあるママ・ムシマ教会へ向かった。ママ・ムシマとは「心の母」を意味し、この教会は信者たちに特に愛されている。約3万人が教会の広場に集まり、それを上回る数の人々が周辺地域に詰めかけた。多くは2~3日前からこの場に野営し、教皇の到着まで何時間も32度の暑さを耐えた。「私たちは何世紀もの間、喜びの時も、悲しみの時も、アンゴラの歴史の苦しみが続いた時も祈りをささげてきた聖なる場所にいます」と教皇は語った。「長い間、ママ・ムシマは沈黙のうちに、教会の心臓が生き生きと鼓動し続けられるように働いてくれました」



4月22日、赤道ギニアのバタ刑務所で、受刑者から十字架を受け取る教皇レオ14世 (OSV)

赤道ギニア

【バタ (赤道ギニア) 4月23日OSV】教皇レオ14世は4月22日、赤道ギニア最大の沿岸都市バタにあるバタ刑務所を訪問し、受刑者たちに「神の愛から排除される人はおらず、神は決して飽くことなくゆるし続けられます」と語った。「私たち一人一人には間違い、苦しみがありますが、主の目には尊い存在として映っています」と述べ、それはイエスが明らかにされたことだと話した。また司法には社会を守る目的があるが、真の正義とは、単に罰を与えることではなく、傷つけられた被害者の生活、加害者の生活、共同体の生活の再建を手助けすることだとも述べた。

「人生はその人の過ちだけで定義されるものではありません。しばしば過ちは困難で複雑な環境の産物です。常に、やり直し、学び、新たな人へと生まれ変わる可能性があります。つまずきの後、立ち上がる人は常に以前よりも強くなるということを忘れないでください」と教皇は受刑者たちを励ました。



国際

教皇レオ14世、就任から1年 対話、平和、尊厳 一貫して求める

【バチカン5月8日CNS】聖ペトロ大聖堂の中央バルコニーに立ち「あなたがたに平和があるように」と世界にあいさつして、教皇に就任してから1年。以来、教皇レオ14世は二分化した教会と分断された世界を、対話と平和と人間の尊厳の尊重を求める熱の込められたスピーチを通して、導いてきた。

就任後の1年、世界は明らかに緊張感が高まり、教会内での分裂も続いた。だが多くの枢機卿たちは、前教皇フランシスコの壮大なビジョンを継承できるのは、プレボスト枢機卿（後の教皇レオ14世）しかない信じて、コンクラーベ（教皇選挙）で選出した。

またバチカンの外でも、米国のトランプ政権は、初めての米国出身の教皇を犯罪に「弱腰」だとしばしば非難し、教皇の度重なる「神はいかなる紛争も祝福しない」という戦争と核軍拡に対する警告を無視し続けた。

それでもなお教皇レオ14世は、一貫した態度や発言を貫き、繰り返し平和と対話と和解を訴え、それが自身の教皇職の特徴となった。

この1年の間に、教皇レオ14世は、交わりと傾聴というアウグスチノ会の理念に深く根ざした教皇としての姿を鮮明にしている。イデオロギーと地政学的な分裂を、対立によってではなく、傾聴と対話によ

て乗り越えようとしている。前教皇フランシスコよりも口調は控えめだが、戦争、移住者、経済的搾取、人間の尊厳といった問題に対して、ますます直接的に語るようになった。

「ある意味で、ロバート・プレボストは今もロバート・プレボストのままです」と語るのは、同じアウグスチノ会員で、教皇の長年の友人でもあるアーサー・プカーロ神父。「教皇職に就いてからも、彼は成長しています」

「枢機卿たちはプレボスト枢機卿に投票しました。それは彼なら、前教皇フランシスコの確約を果たし、また異なる方法で実現してくれるだろうと思ったからです」と神父は続ける。

対話の過程こそが大切

1年目のほとんどは、2025年の聖年やトルコとレバノンへの訪問など、前教皇フランシスコから引き継いだ予定をこなしてきた。しかし聖年が閉幕すると、教皇は独自のビジョンに基づいて教会をより決定的に導き始め、前教皇との違いはこの1年でますます鮮明になってきた。

これまでのところ、教皇は教会にとっての優先順位を、正義と人間の尊厳と平和に置く。正義と愛を重視する姿勢が、教皇レオ14世の世界情勢に対する発言力をま



2025年5月11日、就任後初めて「昼の祈り」を主催した際の教皇レオ14世(CNS)

ます強めている。

特に先月の11日間にわたるアフリカ訪問の際に、戦争、汚職、独裁主義、経済搾取を非難して、教皇は今のところ就任以来最も力強いメッセージを発した。これをプカーロ神父は、実質的な「教皇レオ14世の教皇職の始まり」だと呼んだ。

コンクラーベにも参加した米国ワシントン教区のロバート・ウォルター・マケルロイ枢機卿は、教皇は時を重ねる中で、世界を舞台に倫理的発言をすることに、徐々に慣れてきたと語る。「現代において世界には、教皇レオ14世の言葉以外に、預言的な倫理的指針がありません」

そのように見られても教皇に近い人々は、教皇の指導力がより好戦的になったり、イデオロギー的になったりすることはあり得ないと語る。プカーロ神父は、教皇は命令よりもニュアンス（表現などの微妙な違い）を重んじ、対話自体を教会の使命の一部だと見ていると述べる。

「ですから人々が教皇から、何をすべきか最終的な言葉を聞きたいと思っても、それは存在しないものを探していることと同じです。過程こそが目標なのです。つまり互いに耳を傾け合い、尊重し合い、全ての人が何かを差し出すことができると認識することが重要なのです」と神父は語った。

教皇庁でも、世界においても、教皇から明確な指示や命令を期待すべきではない、と神父は続けた。なぜなら、教皇はそのような人ではないからだ。教皇は繊細なニュアンスをもって、そしてアウグスチノ会の指針を示して導くスタイルを好む。

「教皇は少しずつ人々の心をつかむか、人々の成長を呼び起こす人です。聖霊の助けを受け、教皇がどのように現代の要求に応える教会を形作っていくのかを判断するにはまだ時間が必要だと思います」と神父は最後に述べた。

教皇、ポンペイとナポリ訪問 教皇職の上にマリアの保護を願う

【ポンペイ（イタリア南部）5月8日OSV】教皇レオ14世は教皇に就任して1年を迎



5月8日、ポンペイの「ロザリオの聖母」巡礼堂でミサの前に話す教皇レオ14世(OSV)

えた5月8日、イタリア南部ポンペイにある聖なるロザリオの聖母巡礼堂でのミサ司式のため、ヘリコプターでポンペイに向かった。この巡礼堂はイタリアで最も愛されている聖母聖堂の一つで、教皇は自身の教皇職をおとめマリアの保護の下に委ねた。

この日はまず、何百人もの病気や障害のある巡礼者たちに巡礼堂内であいさつした後、屋外広場に集まった約2万人の人々に向けてミサを司式した。

「ちょうど1年前のこの日に、私はペトロの後継者である教皇職を託されました。この日は偶然にも、ポンペイの聖なるロザリオの聖母の祈願日でした。ですから、私の教皇職の上にマリアの保護を願うために、ポンペイを訪問しました」と語った。



記事全文



記事全文

国際

聖地でキリスト者への暴力広がる イスラエルがレバノン南部を攻撃

【エルサレム5月4日OSV】イスラエルのブルドーザーがレバノン南部のヤロウン村にあるキリスト教系の学校を破壊していると5月2日に報道された後、イスラエル国防軍は、いくらかの損傷はあったとしながらも、学校をブルドーザーで「破壊」はしていないと発表した。

バチカンが発行する新聞オッセルバトーレ・ロマーノとレバノンの国営通信NNAは、レバノン南部の都市ピントジュベイル近郊のヤロウン村にある同校の破壊を報じた。

オッセルバトーレ・ロマーノによると、同校には修道院もあり、「修道女たちは何百人もの生徒の霊的、文化的成長を育ててきた」。ヤロウン村は「2024年のイスラエルとイスラム教シーア派武装組織ヒズボラとの戦闘で、イスラエル軍が村の一部を焼き払って以来、住民は家と土地を追われて人けは

なくなり、廃墟と化していた」という。

聖地管理特別管区の教皇代理を務めるイブラヒム・ファルタス神父は、バチカン・ニュースの社説に、ヤロウン村で破壊された学校と修道院は「爆撃を免れ唯一残っていた建物で、その破壊は何百人という子どもや青年たちの霊的、教育的なよりどころを消し去ったことを意味します」と書いた。

「神聖な場が破壊され、非道な行為を受け、人間が傷つけられ、辱めを受け、宗教的しるしや象徴が踏みじられることが、いったい誰の名のもとで、どのような動機で、可能となるのでしょうか？」と神父は問いかけた。

「人間に対して、これほどまでの憎悪を生み出すものは何なのでしょう？ 信仰や人生が異なっても同じ人間なのです。」

イスラエル側は、ヒズボラが民家や教会を利用してイスラエルに攻撃を仕掛けたため、ヒズボラのインフラに攻撃したとするが、レバノン南部のさまざまな村に同様の理由で攻撃を重ねていると同紙は報じる。

「村人たちは強制退去させられ、その後イスラエルは爆撃する。そうしたうえで、ブルドーザーが入り、家から何から全てを取り除いて更地にしていく。全ての歴史の記憶は消し去られ、人けのない、どこなのかも分からない、過去をなくした

景色だけが残っている」

ファルタス神父は「キリスト教の信仰を宣言する人々に、このような暴力的行為で応えることには納得できません。聖地のキリスト教信者は挑発に反応せず、受け入れ、ゆるし、隣人を愛しているからです。そしてキリストに属する者であることを誇りに思い、キリストの地上での働きと、キリストが御父の愛と聖霊の力を明らかにされた声を聞いたこの聖地で生まれたことを誇りに思っています」とバチカン・ニュースにつづった。

エルサレムでは修道女に暴行

キリスト教信者への暴力は、エルサレムとヨルダン川西岸地区からも聞かれる。

エルサレムではフランス人の修道女が4月28日に、敬虔なユダヤ教徒の男性に地面にたたき付けられ、頭を石にぶつけた。男性は一時立ち去ったが、戻ってきて地面に横たわった修道女を蹴った。男性は逮捕されたが、「エルサレムでは、礼拝所、宗教指導者、キリスト教信者に対する暴力、侮辱、怒りといったさらに耐え難い状況が起きています」とファルタス神父はバチカン・ニュースに記した。

「これらの攻撃はどのような場合にも正当化できませんし、三つの一神教の聖地（訳者註：ユダヤ教、キリスト教、イスラム教はいずれもエルサレムを聖地としている）で起こることなど、絶対に受け入れられません」

「私たちが、自分のいのちと他者のいのちを尊重するなら、平和な共存は可能です。他者の生活をよりよく理解できれば、平和は可能です。また接点をもちながらも、互いによくは知らないという人同士の間で、しっかりとした関係性を築けるなら、平和は可能となります」と神父は書く。



記事全文



レバノンとイスラエルの停戦が発効して10日となる4月18日、レバノン南部のナバティエにあるアパートの窓から外を見る、イスラエルの空爆を免れ両親と共にベイルートへ逃れたアラ・ダヌンさん(12)(OSV)

ホルムズ海峡 立ち往生の船員のため 船員司牧指導者ら、祈りを要請

【ワシントン（米国）4月27日OSV】米国とイランがホルムズ海峡を巡り対峙する中、カトリック教会の船員司牧の指導者たちは、戦争のさなかに海上で身動きがとれなくなっている何千という船員のために、祈りと支援を呼びかけた。

「取り次ぎの祈りの集いを企画しましたし、多くのチャプレンはどうしたら支援できるのかを探って、何とか連絡を取ろうとしています」と、ステラ・マリスの米国統括責任者のジョアナ・オケレケ修道女は語った。ステラ・マリスとは、カトリック教会の船

員司牧を専門に行っている組織で、その名称は「海の星・聖母マリア」から付けられた。

海上の船舶の安全、海洋汚染防止等を担う国連の国際海事機関(IMO)によると、現在約2万人の船員たちがペルシャ湾で足止めされているという。

IMOのアルセニオ・ドミンゲス事務局長は4月16日、CNNの取材に答え、船員たちの状況は「非常に悪い」と語った。

「心の健康や、何の罪もない船員たちが実際に感じている疲労が心配です」と語る一方で、「この地域の国々が、危険があるに

もかわらず、必需品を提供し続けてくれていることに、とても感謝している」と述べた。しかし、「紛争が長引けば」、海上での状況は「より危機的なものとなります」と警鐘を鳴らした。

戦争当初、ステラ・マリスの臨時会長のルイス・クウインテロ・フィウザ司教は4月17日、全世界のステラ・マリスの担当司教たちに宛て、状況をまとめた文書を、英国のステラ・マリスのフェイスブックに投稿した。同司教は、「ステラ・マリスの全世界の家族に祈りを呼びかけます。特に、危険度の高い地域にいる船員のため、彼らの安全のため、危険から保護されるように、また家で心配しながら帰りを待っている家族のために祈ってください」と記した。



記事全文

国際

核軍縮の枠組み「瀕死の状態」

日米5人の司教が声明 NPT運用検討会議開幕に

【サンタフェ（米ニューメキシコ州）4月28日OSV】国連の核兵器不拡散条約（NPT）第11回運用検討会議の開幕に当たり、核軍縮を求める米国と日本の司教たちが4月27日、緊張感と警戒感を声明で表した。アントニオ・グテーレス国連事務総長自身も「核軍縮の枠組みは、瀕死の状態にある」と認めた。

この声明は、米国のニューメキシコ州サンタフェ教区のジョン・C・ウェスター大司教、シアトル教区のポール・D・エティエンヌ大司教、日本の長崎教区の中村倫明大司教、同教区の高見三明名誉大司教、広島教区の白浜満司教によって署名され、「核の脅威が高まっている」状況の中で、世界は「核兵器を永続的に保持するための大規模な近代化計画によって」後退しつつあると警告を発した。同会議は4月27日から

5月22日まで、ニューヨークにある国連本部で開かれる。

NPT—核軍縮のための主要な法的枠組み—は1970年に発効して以来、5年ごとに運用検討会議が開かれている。1995年に無期限延長されたが、近年は「効力を失いつつある」と国連事務総長は4月27日、同会議で発言し、「数十年ぶりに核弾頭数が増加に転じ、核実験が再度議題に上るようになりました」と嘆いた。「核拡散の機運が加速しています。この条約に再びいのちを吹き込む必要があります」と事務総長は警鐘を鳴らした。

核保有国が条約を弱体化させる

司教たちの声明の中で、米国が日本に核爆弾を投下してから78年となる2023年に、この4教区は「核兵器のない世界の

ためのパートナーシップ」を結んだことに触れた。この司教たちの四つの教区は、「核兵器の発祥の地、米国内で最も多くの核兵器が配備されている地域、そして今日に至るまで、世界で唯一、原子爆弾による被害を受けた二つの都市を代表しています」

司教たちは、前教皇フランシスコの「歩みに倣う」と記した。教皇フランシスコは機会があるたびに—2019年の訪日時も含め—核兵器の保有も「倫理に反する」と発言していた。

また司教たちは、2026年の教皇レオ14世の「世界平和の日」のメッセージを引用し「力による抑止力、とくに核抑止は、法と正義と信頼を基盤とせず、恐怖と武力の支配を基盤とする諸国民の関心の非合理性を体現しています」と述べた。

この教皇の発言は「問題の核心を突いています」と司教たちは語り、「核保有国が核軍縮につながる真剣な対話への参加を拒否し続けていること」が、NPTを弱体化させていると非難した。



記事全文

日本語の
声明全文

教皇、ルビオ米国防長官と会談 非公式に「共通の目標」を協議

【バチカン5月7日OSV】教皇レオ14世は5月7日、教皇とドナルド・トランプ米大統領との間で緊張が高まる中、マルコ・ルビオ米国防長官と教皇庁（バチカン）で謁見し、イランでの戦闘、人道支援、バチカンが求める「諦めず平和を推進する必要性」に関して話し合った。

カトリック信者でもあるルビオ長官は、教皇と使徒宮殿で45分以上の私的謁見＝写真・OSV＝を持った後、教皇庁国防省長官ピエトロ・パロリン枢機卿と同省外務局長ポール・リチャード・ギャラガー大司教も同席し、「バチカンと米国の良好な二国間関係の推進という共通の目標」を再確認した。



再確認した。



記事全文

教皇、機中記者会見で 前教皇フランシスコをしのぶ

【アンゴラから赤道ギニアへ移動の機中4月21日OSV】教皇レオ14世は4月21日、アンゴラから赤道ギニアの首都マラボに向かう途中、中央アフリカの西海岸上空を飛行する機中で、この日が前教皇フランシスコの逝去からちょうど1年に当たることから、前教皇に改めて尊敬の念を表した。特に、貧しい立場に置かれた人々へのいつくしみと寄り添いを思い起こした。

教皇は同行する記者団との会見で、2025年の4月21日に逝去した教皇フランシスコが残したものについて振り返った。教皇レオ14世はイタリア語で、「教皇フランシスコが逝去されて1年に当たる今日、教皇様の生き方、証し、言葉、行動によって、教会に残してくださった多くのものを思い起こしたいと思います」と語った。教皇レオ14世は、教皇フランシスコがどれほど真に「最も貧しい人、小さな人、病気の人、子どもたちに寄り添って」生きてきたかを示した。



記事全文

教皇の一般謁見講話

教会は神の国を目指し悪に立ち向かう 5月6日

【バチカン5月6日CNS】教皇レオ14世は5月6日、バチカンのサンピエトロ広場で行われた一般謁見で、カトリック教会は希望の守護者であり、その信者はあらゆる悪にはっきりと反論し、人のいのちを守るためにも反論するよう求められている、と語った。

教会は「地上を旅する神の民」として、「福音の照らしのもとで時代の動きに目を向け、その意味を解釈し、あらゆる形の悪を非難し、ことばと行いをもって、キリストが全人類のために実現することを望まれる救いと、正義と愛と平和のみ国を告げ知らせます」と続けた。



記事全文

ヨハネ・パウロ2世 銃撃から45年 5月13日

【バチカン5月13日CNS】教皇レオ14世は5月13日、バチカンのサンピエトロ広場で行った一般謁見で、45年前のこの日に聖ヨハネ・パウロ2世教皇が銃撃されたことを思い起こした。さらにこの日はファティマの聖母マリアの記念日でもあり、教皇はマリアこそが、教会に求められているあるべき姿の「完全な模範」であり、カトリック信者はマリアの「謙遜で積極的な信仰、従順な姿」に倣うよう求めた。ヨハネ・パウロ2世は1981年の5月13日、一般謁見の際にパパモビレ（教皇専用車）で、サンピエトロ広場を周回している時に2度銃撃された。すぐに病院へ運ばれたところ、銃弾はいのちに関わる臓器を貫通していないことが分かった。教皇は後に、一命を取り留めたのは聖母マリアの保護のおかげだとし、生涯を通じてファティマの聖母マリアへの信心を大切に



記事全文

国内

今年4月、日本カトリック司教協議会・社会司教委員会のもとで社会的な問題に取り組んできた五つのセクション（正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、部落差別人権委員会、子どもと女性の権利擁護部門、HIV/AIDS部門）を統合し「いのち・平和・人権委員会」が設立された。

いのち・平和・人権委員会

今こそ「平和を実現する人」として 社会司教委員会委員長 声明を発表

日本カトリック司教協議会・社会司教委員会委員長の森山信三司教(大分教区)は4月30日、戦争が続く世界の現状に向けた声明を発表し、キリスト者は今こそ暴力に反対し、「平和を実現する人」として生きなければならないと訴えた。

声明のタイトルは「あなたがたすべてに平和があるように」。これは教皇レオ14世が教皇に就任した際のあいさつで冒頭に引用したキリストの言葉につながる。

声明はまず、中東全土に戦火が広がりつ

つあった受難の主日(枝の主日)のミサで教皇レオ14世が語った言葉を紹介する。教皇は、神は戦争を拒絶し、戦争の正当化にイエスを利用することはゆるされないと明確に述べていた。

声明はまた、教皇が今年4月のアフリカ訪問時に「一握りの暴君」によって世界が荒廃させられていると述べたことに触れ、国際秩序の崩壊と分断の進行を憂慮。同時に、エネルギー価格の高騰や各地の紛争が、とりわけ貧しい人々に深刻な影響を与えてい

る現実を指摘した。

日本国内についても、武器輸出制限の緩和や戦後最大規模の防衛力強化に言及し、戦後80年にわたり維持されてきた平和主義が転換することに懸念を表明。この国で起こっていることを自分の問題として捉え、祈り行動するよう呼びかけている。

さらに前教皇フランシスコの言葉から、「戦争は、政治の失敗、人間性の欠如であり、悪しき勢力に対する恥ずべき降伏、敗北なのです。理屈をこねるのはやめて、傷に触れ、犠牲者のからだに触れようではありませんか」を引用。犠牲者の苦しみに目を向けることの重要性を強調した。



記事全文

社会の諸問題に関する情報 メールで配信 日本カトリックいのち・平和・人権委員会

日本カトリックいのち・平和・人権委員会(委員長=森山信三司教/大分教区)は、社会の諸問題に関するさまざまな情報を途切れることなく発信しようと、4月下旬からメールマガジンの配信を始めた。社会正義に関する集会や学習会等の情報を週1~2回のペースで配信する予定だ。

同委員会は、教皇庁総合的人間開発省に対応し、社会に開かれた教会として、より良い世界の実現を目指し、いのち・平和・

人権に関わる諸課題に、統合的な視点から取り組む。

戦争や紛争は難民を生み、差別や貧困は人権侵害や健康問題につながるなど、現代社会の諸課題は相互に深く関わり合っている。同委員会は、人間の尊厳を中心に据え、それぞれの課題のつながりを踏まえながら、教会内外で、また各地において、いのち・平和・人権の擁護のために活動する人々と共に歩み、福音とカトリック社会教説

に基づいた提言の発信、啓発活動を行う。

メールマガジンの配信を希望する場合は、下記のフォームに必要事項を記入して送信すると配信が受けられる。(招待メールが届いた場合は招待メールの「招待を承諾」ボタンをクリックすると登録が完了する)

いのち・平和・人権委員会
メールマガジン登録フォーム



※問い合わせ先は、カトリック中央協議会「いのち・平和・人権委員会」事務局。

電話 = 03-5632-4413

E-mail = social-info@cbcj.catholic.jp

仙台教区いのち・平和・人権委員会 発足記念講演会開く

「いのち・平和・人権委員会」のスタートに伴い、仙台教区では教区の「いのち・平和・人権委員会」(委員長=森山信三司教/大分教区)を発足させ、5月9日、仙台市のカテドラル元寺小路教会^{もとてらこうじ}で記念講演会を行った。

この日のテーマは「なぜ教会は社会問題に関わるのか~シノダリティ(ともに歩む)の中で平和について考える~」。約60人が集って森山司教の講演を聞いた後、平和を求める派遣ミサを共にささげた。

「正義と平和はセット」 森山司教が講演

森山司教の講演は午前と午後の2度にわたって行われた。

午前の講演では、「平和」を意味するヘブライ語の「シャローム」という言葉を取り上げ、それが単に戦争がない状態を指すので

はなく、神と人、人と人との関係に傷や断絶がない状態を意味すると説いた。また聖書の中の「正義」は、「人として当たり前生きる権利を奪われ、苦しみを抱えた人がいたなら、その権利を回復させること、また富が再分配され平等な社会を目指すこと」と解説し、「正義と平和はいつもセット」だと指摘した。

イエスが十字架での死を遂げたことで神と人、人と人を隔てる壁を壊したことに森山司教は目を向け、ミサの中で繰り返される「主の平和」という言葉は、イエスの



森山信三司教

姿に倣い、力を頼むことなく神の働きに協力するという意味を持つと話した。

午後の講話では、聖ヨハネ・パウロ2世教皇(1920~2005年)や日本の司教団など、教会の教導職が教える平和について解説。現在の教皇レオ14世が、就任時から平和を訴えていることを振り返り、教皇に従って平和のために連帯しようと呼びかけた。

講演後のミサは、日本カトリックいのち・平和・人権委員会の担当司教の一人であるエドガル・ガクタン司教(仙台教区)が主司式した。

説教を行った森山司教は、カトリック教会には19世紀末から、社会の中での教会と信仰者の道を指し示す「社会教説」という教えがあると話し、「教会は、社会の中に入って、弱い立場にある人、周縁に置かれた人々に寄り添い、共に歩んでいきます」と述べた。



記事全文

国内

沖縄から平和憲法を考える

5月15日で日本復帰54年

54年前(1972年)の5月15日、沖縄は日本に復帰し、本土と同じ日本国憲法が施行された。復帰への原動力となったのは、平和憲法を求める沖縄の人々の強い思いだ。

国が「憲法改正」を急速に進めようとする今、日本各地で「憲法改悪」と反対する人々の声も大きくなっている。復帰の日に合わせ、沖縄から憲法について考える。

日本復帰—平和憲法の下へ

沖縄は、太平洋戦争(1941~45年)末期の沖縄戦で住民を巻き込んだ地上戦を経験し、戦後は米軍統治下に置かれた。憲法記念日が始まったのは、米軍統治下にあった1965年。人々が戦後の復興に努める中、米軍による人権侵害が多発していた。

日本国憲法に保障された基本的人権が沖縄の人々にも認められることを目指し、61年4月、市民が「沖縄人権協会」を設立。復帰直前の72年4月、当時の那覇市長が提唱し、「沖縄県憲法普及協議会」が結成された。目的は「日本国憲法の原理と精神を普及し、その実現を図ること」だ。同協会と同協議会が憲法記念日を中心に例年開く

憲法講演会も今年で60回目となった。

那覇教区広報担当の浜崎眞実神父(横浜教区)は、憲法記念日を含む4月28日から5月15日は、「人々が現行憲法について知るために大切な時期」だと話す。

4月28日は、日本が連合国と結んだサンフランシスコ平和条約が発効し(52年)、主権を回復した日。だが沖縄を日本から切り離れた日でもあり、以後27年間、米軍による統治が続いた沖縄では「屈辱の日」と呼ばれている。

2016年のこの日、沖縄県うるま市の女性が元海兵隊員の米軍属の男に殺害される事件が起きた。毎年、4月28日に合わせて遺体の遺棄現場付近に献花台を設けている吉田勝廣さん(元同県金武町町長)は、今年も祈りに来る人々を迎え、こう話した。

「花は『(犠牲になった)あなたを忘れない』という皆さんの心です。その心を少しでも長く大切にしたい。自宅から花瓶を持ってきて生けるようにしています」



吉田勝廣さん

9条を守る、日本

本土では、憲法施行後の1950年代から70年代にかけて米軍基地への反対運動が盛んになり、基地の整理縮小が進んだ。

本土を出た米軍基地が移った先は、米軍統治下の沖縄だった。その結果、日本の国土の約0.6%しかない沖縄に国内の米軍専用施設の約70%が集中し、沖縄は今も過重な基地負担を強いられている。日本は沖縄を犠牲にして、「戦争の放棄 戦力の不保持 交戦権の否認」をうたった憲法9条



9条の条文を刻んだ沖縄・読谷村役場の碑「萌芽」。「我々自身の力を信じよう。世界中が9条の精神で満ちることを信じよう」と呼びかける

を守り続けていると言える。

また憲法9条のある日本は戦争で人を殺し、殺されることから免れてきたと言われるが、果たしてそうだろうか。米軍は沖縄の基地からベトナム戦争(1955~75年)や湾岸戦争(90~91年)などに参戦し、戦地で軍人や市民を殺害している。



記事全文

キリスト者として平和憲法を考える
超教派で初の「憲法フェス」開催

「キリスト者憲法フェスティバル2026」が5月2日、東京・目黒区の恵泉バプテスト教会で開かれ、キリスト者として平和憲法を考えようとする6人によるリレートークが行われた。約130人が参加してトークに耳を傾け、共に歌い、平和を祈った=写真。

この催しは10年以上前から日本バプテスト連盟が続けてきたが、改憲論議が活発化する今年、初めて教派を超えた発題者を招いて行われた。主催は、日本バプテスト連盟東京・神奈川・北関東社会委員会。協賛としてカトリックも参加するキリスト者平和ネットや日本YWCAなどが名を連ねた。

リレートークを担当した6人は、それぞれ平和に関する活動を続けてきた立場から、平和と憲法について語った。その一人、弘田しずえ修道女(ベリス・メルセス宣教修道女会)は、イエスが、自身を殺そうとする人々に対して「立ち向かうのでもなく逃げるのでもなく、『彼らのまん中を通り抜けて、去って行かれた』(ルカ4・30)」ことに言及。イエスの非暴力は「創造的」だったと述べ、「イエスの力は、平和と和解を可能にする」と強調した。



記事全文

ベトナム人技能実習生を支援
ダン修道女に聞く

日本で働く外国人技能実習生は2025年末時点でおおよそ46万人、その4割をベトナム出身者が占めている。現在の技能実習制度は、実習生の保護体制が不十分であることから、さまざまなトラブルや労働問題が生じている。実習生たちから「シスター姉ちゃん」と呼ばれ慕われているダン・ティ・ジェン・フーン修道女(42/アジジの聖フランシスコ宣教修道女会)は、コロナ禍を機に実習生支援に関わり始めた(以下、シスター・ダンと表記)。



支援のためのホットラインで活動するシスター・ダン

シスター・ダンはベトナム・ホーチミン出身。2005年に来日し09年に修道会に入会。11年に初誓願式に臨んだが、その数日後、式に参加していた若い男性の技能実習生から助けを求められた。

その実習生は、休日を月に4日しか与えられず、給与は月6万円ほど。生活の苦しさから実習先を逃げ出し、在留資格を失っていた。

「その時は、自分も日本の法律を知らないし、就労制度についても分からなかった。助けたい思いはあったけれど無理でした」

17年に終生誓願を立て、本格的に実習生支援に関わるようになったのはコロナ禍からだ。イエズス会社会司牧センター(東京・千代田区)のグエン・タン・ニャー神父(当時)らと共に、困窮しているベトナム人に食料を送る活動に参加する。



記事全文

国内



司祭叙階式で中野裕明司教(鹿児島教区/中央左)から按手を受ける受階者・久山元太郎助祭(写真提供:同教区広報部)

鹿児島教区 7年ぶりに司祭誕生 久山元太郎神父

鹿児島カテドラル・ザビエル記念聖堂で4月12日、中野裕明司教(鹿児島教区)主司式により、久山元太郎助祭(同教区)の司祭叙階式が執り行われた。鹿児島教区での司祭叙階は、現教区本部事務局長・霧島彬神父の叙階以来7年ぶり、会場には250人余りの信者が駆け付けた。久山神父は1969年生まれ。神奈川県茅ヶ崎市出身。大学卒業後、教員や介護関係の仕事に従事した後、教区司祭を志し、2018年春、鹿児島教区(当時、郡山健次郎司教)の門を叩いた。叙階後の赴任先は鹿児島・川内教会。



記事全文

朝鮮通信使を知る絵本原画展 高麗博物館で開催中

朝鮮通信使が果たした役割や、当時の人々の交流の歴史を伝える『絵本 朝鮮通信使』(「嶋屋」友の会発行、2021年)の原画展が、東京・新宿区の高麗博物館で開催されている。

朝鮮通信使は江戸時代、12回にわたって朝鮮半島から日本に來訪した。その交流には、互いに欺かず、争わず、真実を持って交わる「誠信交隣」の精神が流れていた。

同館理事の円谷恵さん(68)は、「日韓和解」がキリスト者としての自身のテーマであり、ミッション(使命)だと話す。

絵本原画展は6月21日まで。



記事全文



円谷恵さん。お気に入りの原画「通信使の道・海路(II)」(右上)と共に

『新カトリック大事典』新たなオンライン提供 「ジャパンナレッジ」に搭載

『新カトリック大事典』オンライン版(編集=学校法人上智学院)が4月20日、新たなデータベースサービス「ジャパンナレッジ」に搭載された。大学図書館を中心とする高等教育機関等が広く導入する「ジャパンナレッジ」に搭載されたことで、研究・教育現場での利用環境の充実が期待される。個人向けサービスも利用可能。

『新カトリック大事典』は1996年から2010年にかけて書籍版(全4巻と別巻)が研究社から刊行され、16年に「研究社オンライン・ディクショナリー」(KOD)がオンライン版の提供を開始。書籍版の内容を再点検して補正を加え、継続的に内容の精査、修正、追加を重ねている。



記事全文

公会議の精神体現 日本に可能性 竹下節子さんが講演

長くフランスに住み、キリスト教関係の多くの著作を発表している竹下節子さんの最新刊『カトリックの缶詰 ― フランスと日本のはざままで』(オリエンズ宗教研究所)の出版を記念する講演会が4月25日、松原教会(東京・世田谷区)聖堂で開かれ、40人余りが参加した。竹下さんは、第2バチカン公会議(1962~65年)でたどり着いた「信教の自由は人間の尊厳」、別の言い方をすれば「全ての人の救済に役立つものであれば、さまざまな道がある」という考え方は日本人の精神性に合致しており、日本は公会議の精神を体現できる可能性がある国だと説明した。



記事全文



東京・松原教会で行われた講演会で話す竹下節子さん

第4回サビエルフェスタ 地元で根付く予感 山口教会

山口教会(山口市)で4月29日、教会を親しみやすいものにするイベント「サビエルフェスタ(サビフェス)」が開かれた。サビフェスは昨年11月の第3回から、広島教区の公式行事として行われている。同教区の青年たちを中心とした実行委員会が主催し、広島教区青年活動企画室の協力の下、企画・準備を進めた。当日は教区内外から集まった20人余りの青年スタッフが活躍。中国地方だけでなく、四国や九州から30もの物販やワークショップなどの出店があり、地元の人々を中心に、前回は上回る1500人余りが来場した。

山口教会の信徒が企画した教会内を巡るスタンプラリーや、コーヒーなどを飲みながら片柳弘史神父(イエズス会)の講話を聞く「マリアカフェ」、聖堂でテゼの祈りも行われた。



記事全文



聖堂前の広場でサビフェスに参加する人々(主催者提供)

主日の福音解説

6月7日 (キリストの聖体)

ヨハネ 6・51-58

荒れ野を歩む糧

「わたしは、天から降^{くだ}って来た生きたパンである」。この言葉を含むヨハネ福音書第6章には出エジプトの記憶があるとされている。モーセに導かれてエジプトを脱出したイスラエルの民は荒れ野で飢え渴き自力では生きられないことを悟る。その時神は天からマンナを降らせる。荒れ野のマンナは腹を満たすだけの食べ物ではなかった。毎朝与えられるその糧を通してイスラエルは、命を支えるのは自分の蓄えではなく今日を養ってくださる神への信頼であると知った。

第6章でヨハネはこうした旧約の出来事を背景にしながら聖体について語る。神が与えるまことのパンとはもはや荒れ野に降ったマンナではない。天から降って来た神の独り子、イエス・キリストご自身である。「わたしが与えるパンは、世を生きるためのわたしの肉のことである」とイエスが宣言する通りである。ところが、人々はこの言葉につまずく。「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」。この戸惑いは、ある意味では自然とも受け止められる。ヨハネもまた、そうした戸惑いを簡単に消し去ろうとはしない。むしろ、読者にもう一つの問いを向ける。つまり「この言葉を語っているのは誰なのか」という問いである。同じ6章でヨハネは湖上を歩くイエスの言葉を響かせる。ギリシャ語でエゴ-

エイミー (=わたしだ)と記されている箇所である。この「わたしだ」は、神がモーセに示された自己啓示、すなわち「わたしはある。わたしはあるという者だ」(出3・14)にさかのぼる表現であろう。つまり、ご自分の肉と血とを与えられる方は単なる預言者ではなく、荒れ野で民を養い^{あし}葦の海を分けて民を通された神の命を内に持つ方なのである。

こうしてヨハネは、出エジプトの記憶、マンナのしるし、そして神の自己啓示を重ね合わせながら、聖体がどれほど尊いたまものであるかを明らかにしていく。

イエスをご自分の血と肉を「まことの飲み物」「まことの食べ物」として人類に与える。聖体を頂くたびにわれわれは十字架上でご自分の命を与えられたキリストを頂くのである。そして、キリストを頂く者はキリストの命によって生かされ、キリストのように自分を与える者へと変えられていく。しかし、この恵みを知ってなお、信仰の歩みは決して平坦ではない。われわれは今日も明日もまたそれぞれの荒れ野を歩くのである。孤独や不安を抱えながら、時には人間関係の痛みを抱えながら。荒れ野とはそのような現実のただ中であってそれでも神の命に支えられて歩む場所なのである。主は言われる。「わたしを食べる者は、わたしによって生きる」

聖体祭儀にあずかるとはこの命のパンを受けるために主の下に集められることである。飢えを隠さず、弱さを恥じず、主の御前に出ることなのである。この命に養われた者は家庭で職場で学校で小さなパンとなるよう招かれている。人を裁くのではなく支え、閉ざすのではなくつながり直し、自分にできる小さな愛を身近な人に差し出して生きるのである。

聖体は、荒れ野を歩む教会の糧である。われわれはこのパンによって、ただ今日を耐えるのではない。永遠の命へ向かって歩むのである。
(熊川幸徳神父/サン・スルピス司祭会)

6月14日 (年間第11主日)

マタイ 9・36~10・8

確信できる道

カトリック教会には、最初からイエス・キリストが歩まれた道に従って生きようとする人々がいました。彼らは全身全霊でイエス様に従うために自分の故郷を離れて砂漠に向かいました。そして、徹底した断食や祈りでイエス様と完全に一致しようとしてきました。これがいわば修道生活の起源です。

もちろん、西洋では修道生活の形によってこれを意味する用語がいろいろありますが、日本では一般的にこれを指して「修道生活」といいます。本当の意味は「この世にあって聖別された生活」ということで、「奉献生活」と翻訳されます。つまり、貞潔、清貧、従順の福音的勧告の誓願を立て、神に自分自身を完全に奉献して、教会と世界の中で主から授かった使命を全うし、完徳に至ってイエス・キリストと完全に一致する生活を意味します。

このような生活をわたしたちは「修道生活」といいますが、「修道」とは、言葉の通り、正しい道を修めることが教えであるという中国の古典の表現に基づきます。すなわち、「修道生活」は正しい道を修める生活です。東洋哲学で言われる「道」とは、万物の原理であり、理想的な人間像を成し遂げるために従うべき生の根本と見なすことができます。そういう意味で、その理屈をわたしたちは「道理」といいます。西洋の「奉献生活」が東洋では「修道生活」として伝わった理由は、イエス・キリストに従うことが、まさに理想的な人間像を成し遂げるためにわたしたちが歩むべき「みち」で、それが「道」だから、これを自分の人生で実現するのが「修道」、つまり「道を修める」ことだと思ったからでしょう。

今日、イエス様は12人の弟子たちにご自分の権能をお授けになり、他のどこの道にも行かず、イスラエルの家の失われた羊のところへ行くように言われます。失われた羊は何を意味するのでしょうか。彼らは正しい道の上にはいないのです。では、彼らはどこにいたのでしょうか。元々、野生の羊は慣れた道にしか行かないので、道に迷うことはほとんどないそうです。ところが、羊飼いにされた羊は、羊飼いが導くところへ、また草が生えたところへ群がって移動するので、羊飼いがいなかったり、その群れから離れたりと道に迷ってしまうのです。

こういう観点から見ると、修道者は道を整える人なのです。そして司祭はキリストから羊を導く権能を授かった人なのです。そこで、道に迷った誰かがいれば、修道者から、また司祭から正しい道を見つけることができます。現代において、私たちの周辺にはどう生活すればいいのか、また今正しく生きているのかと悩み苦しむ人がたくさんいます。子どもから大人に至るまで、自分の人生に確信をもって生きる人は多くないと思います。他の誰よりも間違える恐れが全くないと確信できる、そのような道を歩む人がいるならば、自分が道に迷った時に、彼らを通してまた正しい道を見つけることができるでしょう。彼らがまさしく修道者、聖職者なのです。

イエス・キリストに従う道にはあらゆる義と真理があり、その最後にはこの道を最後まで歩んだ人々に与えられる永遠の幸福と命が備えられているからです。

(ダニエル・キム・ドンウク(金桐旭)神父/韓国殉教福者聖職修道会)



主日の福音解説

6月21日（年間第12主日）

マタイ 10・26-33

最後の最後まで…

「隠されているものすべては知られて明らかにされる」というイエスの言葉に私たちは「隠していることについて後で怒られるのではないか…」とドキッとしてしまう時があります。

さらにイエス様は「人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言う」（同33節）とされました。私たちにはさまざまな事情があって、イエス様を知らないと言うことがあります。神様より自分の望みを優先させてしまうとき。人を傷つけてしまったとき。お祈りしたい、ミサに行きたい。しかし、自分だけがカトリックのお祈りをしたり、ミサに行ったりすることはできないとき。もう疲れていて今日は休みたいとき。教会の事は忘れてしまったと諦めてしまったときなど。後でそのことを神様に怒られるのではないか、知らないと言ってしまった自分を神様は見捨てられるのではないかと…。苦しみ悩みながら「今はイエス様のことは知らない」と…。

「しかし主は、恐るべき勇士としてわたしと共にいます」（エレミヤ20・11）。

ユダに引き渡され、イエス様は捕まりました。ペトロは捕まっているイエス様のことを人々に「あの人とわたしは関係ない」と否定しました（マタイ26・69-75）。もし、この時捕まっているイエス様が「わたしはあのペトロを知っている。わたしの仲間だ！」と人々に言ったら、どうなっていたでしょうか？ 実際、あの時ペトロはイエス様と一緒に捕まらずにすみしました。

私たちが人々の前で力強く信仰を宣言することができたのか？ 命を顧みず殉じたのか？ではなく。イエス様はどんな時も私たちと共にいてくださっています。

鶏が鳴いたその時、「イエス様はこんな弱いわたしと今も共にいてくださっている。わたしをまだ救おうとされている」。自分の弱さに打ちひしがれながら、ペトロはイエス様のやさしさに包まれて激しく泣きました。

「主は貧しい人の魂を 悪事を謀る者の手から助け出される」（エレミヤ20・13）。

私たちがイエス様のやさしさを思い出しては「ごめんなさい。イエス様と共に歩むことができなくて。ごめんなさい。信者として強く生きることができなくて。ごめんなさい。イエス様を知らないと言ってしまって」と涙を流す日があります。



イエス様はそんな私たちを責めません。私たちの弱さと最後まで共にいてくださり、救おうとしてくださっています。あの時黙ってペトロをお救いになられたように。

「ほら、見てください。わたしは世の終わりまでのすべての日、あなたがたと共にいる」

（マタイ福音書、イエス様の最後のことば）

（寺浜亮司神父／福岡教区）

6月28日（年間第13主日）

マタイ 10・37-42

聖ペトロ使徒座への献金

弟子を派遣する

使徒と呼ばれる弟子を選び出し、宣教へと派遣するに当たってイエスはさまざまな指示を説教という形で行っています（マタイ10・1-42参照）。この説教の結びの部分が本日の福音の箇所です。

まず、イエスは弟子たちに確かな覚悟を求めています。

「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない」と言っています。

「また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない」とも言っています。

弟子は家族との関わりよりもイエスとの関わりを優先することが求められるということです（家族への愛を否定しているわけではありません）。

またイエスに従うことによってもたらされる試練や困難を引き受けていくことも求められるということです。

次に、イエスは「自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである」と断言しています。

イエスの弟子とは何よりもイエスとつながって生きる者のことです。イエスとのつながりを失うならば、もはや弟子はイエスから遣わされた者として宣教することはできません。

またイエスとのつながりを生きようとする者は、決して命を失うことがないと励ましています。イエスは十字架の死と復活を通して命を与えることができるお方だからです。

最後にイエスが遣わす者を受け入れる人への報いについて語っています。

イエスが派遣した宣教者を受け入れることは、イエスを受け入れるということです。それはとりもなおさずイエスをこの世へと遣わされた父である神を受け入れるということです。

「預言者を預言者として受け入れる人は、預言者と同じ報いを受け、正しい者を正しい者として受け入れる人は、正しい者と同じ報いを受ける」と説明しています。

預言者、正しい者というのはイエスが遣わす宣教者と同じ意味でしょう。

「わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける」とイエスは説教を締めくくっています。

弟子たちがもたらす福音を受け入れるならば、その人たちがどんなに大きな報いを受けることになるか、イエスは宣教の働きの重要性を弟子たちに悟らせようとしています。



（立花昌和神父／東京教区 カットは全て高崎紀子）

文化

シグニス・ジャパン 50周年記念ミサ

平和賞と動画フェスティバルの授賞式も

世界広報の日である5月10日、シグニス・ジャパン(SIGNIS JAPAN <カトリックメディア協議会>)の活動が今年5月で50周年を迎えたことを記念するミサが、東京・港区の聖パウロ女子修道会聖堂で行われた。ミサ後には、第3回シグニス平和賞(松本准平監督/受賞作品『長崎一閃光の影でー』)ならびに第2回シグニス動画フェスティバルの授賞式と祝賀会も開かれ、50人余りが参加した。

シグニスの出発点は1928年、映画その他の視聴覚メディアを通じた福音宣教を目指す、OCIC(国際カトリック映画視聴覚協議会)が、バチカンの外部組織として設立されたことだった。日本では76年5月にOCIC JAPANが創立された。

聖ヨハネ・パウロ2世教皇の強い意向で2001年、ラジオやテレビで福音宣教をしていた人々の集まりであるUNDA(国際カトリックラジオ・テレビ協議会)とOCICが統合されて、SIGNIS(国際カトリックメディア協議会)が誕生。日本でも同年、OCIC JAPANは「シグニス・ジャパン」と名称を変え、今日まで活動が続けられている。

OCIC時代から続く活動の一つが、カトリックの精神に合致するテーマを描いた優秀な映画作品の監督に贈られる「カトリック映画賞」の選定。今年7月には、50回目の映画賞授賞式と上映会が予定されている。



シグニス・ジャパン顧問司教の酒井俊弘補佐司教(大阪高松教区/左から5人目)、顧問司祭の晴佐久昌英神父(東京教区)、平和賞と動画フェスティバルの受賞者たち

短歌

毎月5日まで(必着)はがきに3首以内、1人1枚を厳守。氏名に振り仮名を明記。送り先は本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



石畳メリージェーンの音響き坂の上には教会の白

はっとり めぬ

【評】「メリージェーン」は足の甲にストラップのついた靴、漫画の登場人物の名に由来する。「石畳」、「坂」が靴音の響きを弾ませているが一体誰の靴音だろう。さまざまに想像が広がり映像の浮かぶ楽しさがある。

半身をお湯に打たせて考える言えたかもしれない別の言葉を

秋田 矢澤 麻子

もう少し生きて語れと主は我に恵み与えつ声帯残し

秋田 進藤八重子

淡路島岩屋みなどの春の海クリムトの絵の淡きみづいろ

東京 笹浦 泉

セーターのどこに止めようこのトンボ胸に灯ともす布のブローチ

東京 藤木倭文枝

十字路で瀕死のカラスと目の合へど置き去りし我は寝付けずにゐる

横浜 西前 敦子

引退しアイルランドへ帰るひと 生魚喰ふ日本に老いて

熊本 村田 弘子

人ら皆ラインで済ますもポストまでロザリオを繰る花の咲く道

岡崎 吉川 光子

この道で良かったのかと振り返る我が足跡は何も答えず

那須烏山 小島 寿子

プラチナ婚元気に迎えし夫と我七の七十倍赦し赦され

長崎 吉田 律子

俳句

稲畑廣太郎選

毎月5日まで(必着)はがきに5句以内。氏名に振り仮名を明記。送り先は本紙1面に記載。下記QRコードからオンライン投稿も可。



◎金縷梅や風と戯れ縫を解く

川崎 守田 光代

【評】金縷梅の縮れた花弁の特徴が的確に描けた

◎二つ三つ微笑んで咲く桜かな

福岡 鍵山 鈴代

【評】桜が開花する様子が明るく表現されている

春の川弾む水音水の嵩

神戸 内田 泰代

独り身の復活祭を聖堂で

甲府 穴水 公一

棺にも送る人にも花吹雪

秋田 畑山真理子

薄氷の描く光の万華鏡

神戸 涌羅 由美

紫木蓮聖母の如く凛と立つ

日野 広山 弘子

幹の先枝の先まで春日和

大阪 酒井 湧水

山笑ふ木々の言伝ちりばめて

神戸 高橋たづ子

春泥をわざと踏みたる靴の跡

東京 脇谷 善之

ミモザ咲く小さき花のパワーかな

川崎 吉田千津子

花蜜柑兄と暮らせし二十年

東京 草間をり絵

建築士目指す学生下萌ゆる

神戸 西村みどり

春光や白眩しくて叙階式

福岡 木本 敬子

春寒し磔刑の主の釘の跡

秋田 進藤八重子

貝寄風に押され近づく難波の津

神戸 屋代 弘忠

手をつなぎ散歩する見ら風光る

草加 長谷部禎子

咲くものの香りを載せて風光る

選者吟

きょうをささげる(教皇による祈りの世界ネットワーク) 6月

【教皇の意向：スポーツの価値】

スポーツが、国家間や異文化間の平和、出会い、対話の道具となり、尊厳、連帯、個人の成長といった価値を高めるものとなりますように。

【日本の教会の意向：教皇】

教皇レオ14世のために祈ります。教会に与えられた牧者が、神の恵みに満たされて、教会と世界の善のために奉仕していくことができますように。

ミラノ・コルティナ冬季オリンピックで日本の「りくりゅう」ペアがフィギュアスケートペア競技でショートプログラムでのミスにもかかわらずフリーで素晴らしい

演技をして金メダルを取り、日本の人々に感動を与えました。同時に、他国のペアが互いに敬意を示す姿も印象的でした。サッカーファンとしても知られた前教皇フランシスコは「スポーツで最善を尽くすことは聖性への道である」と述べています。教皇庁文化教育省はスポーツに関する初めての文書『自分の最善を与える』(2018)の中で、スポーツは徳を高め、共通善を目指し、平和と連帯を養うと述べています。スポーツが国境や文化を超えた連帯、尊厳と平和を育み、その価値を高めていけるよう祈りましょう。

*

昨年、第267代ローマ教皇として選ば

れたレオ14世は初の米国出身の教皇として注目されています。聖アウグスチノ修道会に属し、南米ペルーでの司牧経験を経て、同会の総長としての任務を12年間経験し、教皇庁司教省長官も歴任し、教会全体について幅広い経験を積んでいます。同時に、その心は前任の教皇フランシスコの思いを継ぐもので、初の使徒的勧告『わたしはあなたを愛している』では、「貧しい人々に対する教会の愛は『教会にとって本質的なもの』と述べ、貧しくされている人々への愛から世界の平和に心を向ける取り組みを精力的に果たしています。レオ14世の奉仕の働きに恵みが豊かにあるよう祈りましょう。

訃報

アナ・マリア・カレロ 修道女（聖マリアの無原罪教育宣教修道会）3月9日、同会名古屋修道院で老衰のため逝去。89歳。



1936年スペイン・ブルゴス生まれ。53年同会入会。55年初誓願。60年終生誓願。61年来日。63年、岐阜市に創立された同会岐阜修道院および聖マリア女学院高等学校に同時に派遣された。43年間、同校の中学（87年開校）・高校生に世界史と聖書を教え、最後の20年間は校長職を務めた。定年退職後も中学1年生の聖書を担当したが、その授業中にくも膜下出血で倒れ、以来20年間にわたって入退院を繰り返し、車椅子での生活となった。その中であつてもリハビリに励み、不自由になった言葉と、自身の存在をもって福音宣教の使命を、熱意と喜びを持って果たし続けた。生徒のみならず保護者への聖書セミナー、里親運動、また元氣だった時には、小教区への協力も惜しまなかった。その教えに導かれて洗礼の恵みにあずかった人々も少なくない。昨年末、足首の小さな骨折によって、寝たきりの生活を余儀なくされ、最期の2カ月は名古屋修道院に移った。在宅医療関係者と姉妹たちの手厚いケアの下、3月9日早朝、前夜からの眠りのまま、静かに安らかに、天の御父の元に旅立った。日本、山々に囲まれた岐阜の田舎、中高生たち、出会った全ての人々をこよなく愛した89年の生涯を全うした。最後の20年間に最もよく口にした言葉は「お祈り」だった。

三輪 篤子（ひさこ） 修道女（ショファイユの幼きイエズス修道会）3月24日、大阪市内の病院で出血性胃潰瘍のため逝去。90歳。



1935年広島県生まれ。63年同会入会。65年初誓願。初誓願後、和歌山信愛（和歌山）、豊島（東京）、神戸の同会修道院に派遣され、幼稚園教諭として幼いのちに奉仕した。熊本ではイエズスの聖心（みこころ）病院で事務職、大阪信愛女学院短期大学（当時）では学生寮の寮監として学生たちに同伴した。大阪信愛女学院高等学校（当時/以上大阪）では非常勤講師として宗教科を担当しながら、英知大学（兵庫）神学科（当時）で学び、研さんを積んだ。その後も各地で宗教科の教諭として奉仕したが、特に大阪信愛女学院には20年余り勤務した。高齢になっても、キリスト教教育への熱意はあらゆる世代に開かれていた。日々の共同体の買い出し、困りごと相談や病者の世話に至るまで喜んで奉仕。地域の人々、行きつけの店の店長、交番の警察官とも親しくあいさつを交わす「気さくなおばあちゃん」的存在だった。修道生活60年5カ月の生涯を、さりげなく神の愛を伝える宣教者として生き切った。

大川好洋 神父（神言修道会）4月3日、入所先の介護医療院で慢性心不全のため逝去。64歳。1961年生まれ。84年同会入会



ならびに初誓願。89年終生誓願。90年司祭叙階。同年から93年まで同会オーストラリア管区に在籍し、アーノルド小神学院（当時/愛知）の指導司祭を務めた。94年長崎南山中学校・高等学校教諭（長崎）。2019年能代主任ならびに能代カトリックこども園園長（秋田）。22年長浦小教区管理者（愛知）。23年西町助任（長崎）。25年末から入院し、26年3月に介護医療院に入所した。長崎南山学園では、宗教の授業や集いを通じて子どもたちに温かい愛情を注いだ。神学生の時から手話に取り組み、派遣された各地で手話通訳の奉仕や手話ミサの指導をした。

日野武満 神父（横浜教区）4月3日、静岡県御殿場市内の病院で逝去。92歳。1933年東京都生まれ。



66年司祭叙階。同年松本助任（長野）。70年横須賀大津主任（神奈川）。81年沼津主任（静岡）。84年ローマで研修。87年小田原主任（神奈川）。97年上田主任。98年小諸主任を兼任（以上長野）。2000年三浦海岸主任。14年中和田主任（以上神奈川）。24年から神山復生病院（静岡）で療養していた。大の子ども好きで、各地で幼稚園長を歴任。ローマ研修で学んだモンテッソーリ教育の精神を、幼児教育現場へ情熱を持って注いだ。私生活ではランの栽培や愛犬を慈しむ趣味を持ち、その温厚で慈愛に満ちた人柄は、信徒のみならず地域住民からも親しまれた。

上原功宏（かつひろ） 神父（横浜教区）4月4日、神奈川県横須賀市内のサービス付き高齢者向け住宅で逝去。86歳。1939年神奈川県生まれ。70年司祭叙階。同年金沢助任。



73年JOC（カトリック青年労働者連盟）の同教区青年労働者養成担当。77年青年勤労者の家担当。82年鹿島田主任（以上神奈川）。91年韓国で研修。94年相模原主任。2000年中原ならびに溝ノ口教会協力司祭。01年港南主任（以上神奈川）。06年から韓国でサバティカル。11年沼津・三島・熱海協力司祭（静岡）。21年から療養していた。司牧の傍ら、JOC活動や正義と平和に関する活動に情熱を注ぎ、労働者や弱者、外国籍の人々に寄り添う姿勢を貫いた。親しみやすい人柄で、大のおしゃべり好き。多くの人々との対話を何よりも楽しみ、その明るく開かれた交流は、信徒のみならず多くの人たちに愛された。

ヴィタリ・ドメニコ 神父（イエズス会）4月5日、ロヨラハウス（東京）で老衰のため逝去。88歳。1937年イタリア・ラペリーノ生まれ。58年同会入会。64



年来日。70年司祭叙階。72年麹町助任（東京）。76年山口助任、主任司祭代行を経て主任。91年に山口サビエル記念聖堂が消失した時は、主任司祭として再建に取

り組んだ。2005年徳山ならびに下松（くだまつ）の担当司祭（山口）。07年麹町主任。12年津和野ならびに益田主任（島根）。14年幟町（のぼりちょう）主任（広島）。18年日本二十六聖人記念館館長（長崎）。21年から幟町で司牧活動。22年防府主任。23年山口助任（以上山口）。今年1月からロヨラハウスで療養していた。生涯のほとんどを教会使徒職と幼稚園使徒職にささげ、とりわけ、モンテッソーリ教育の普及に尽力した。いつも笑顔で、誰に対しても心を開き、温かな人柄だった。

高藪修 神父（新潟教区）4月7日、新潟市内の高齢者施設で逝去。88歳。1938年秋田県生まれ。64年司祭叙階。65年に花園助任を経て青山助任となり、70年から主任。



71年白根主任（青山兼任）。85年同教区本部事務局長。90年新発田ならびに村上集会所主任。93年白根主任（以上事務局長を兼任）。97年加茂主任（新発田兼任）。2001年花園主任。同年から03年まで佐渡主任を兼任。03年白根主任（花園兼任）。10年高田協力。20年から司教館付（以上新潟）。司祭の務めを果たしながら、学校

法人聖母学園が運営する各幼稚園園長も歴任した。人の心を和ませるその笑顔は、さまざまな役割を兼務して奔走していた頃も、病を得て主任司祭を退いた後も、そして晩年を過ごした高齢者施設で身体が自由に動かせなくなり、言葉を発することが難しくなってからも、決して失われることはなかった。喜びを伝え続けた88年の生涯だった。

庄司篤 神父（フランススコ会）4月16日、東京・世田谷の同会聖アントニオ修道院で肝外胆管がんのため逝去。94歳。1931年奈良



県生まれ。54年京都大学理学部数学科を卒業。同期には世界的数学者・広中平祐（へいすけ）氏がいた。高校の数学教師として働いた後、59年に福岡市の高宮修道院に併設された同会ラテン語学校に入学。60年3月24日に修練期に入る。61年初誓願。64年荘厳誓願。68年司祭叙階。叙階後、米国への留学を経て78年から軽井沢（長野）にあったリティロ（隠遁くんと）所で祈りの生活を送り、同施設閉鎖後は各小教区で司牧に当たった。聖アントニオ修道院に異動後は、翻訳や霊的指導などのために働いた。

告知板

■東京

▶初金の祈りの集い 6月5日（金）午後7時～8時、麹町教会主聖堂。司式＝柴田潔神父（イエズス会）。奉唱＝初金聖歌隊（指揮：大内葉子）。電話 03-3263-4584 麹町教会

▶写教の会（その日の福音を毛筆で写し、心を主に向ける集い）6月21日（日）午後4時30分～5時50分、イエズス会岐部ホール309号室。主宰＝高橋登志子修道女（聖心会）。持参する物＝筆ペン、文鎮、下敷き30×50㎝（フェルトまたは新聞紙）。6月18日（木）までに要参加申し込み。500円（自由献金）。☒ phostere@gmail.com 古賀

■大阪

▶PTSDの日本兵と家族の思いと願い 大阪証言集会 6月27日（土）午後0時30分～4時30分、PLP会館5階大会議室（大阪市）。記念講演「私の気づきー戦争と人権ー」（ダニー・ネフセタイ/木製家具作家、イスラエル軍元兵士）、PTSDの日本兵の家族の証言と交流会。資料代1,000円。電話 080-1121-3888 黒井

■福岡

▶土井善晴『一汁一菜でよいという提案』（新潮文庫）読書会 6月6日（土）午後2時～4時、福岡黙想の家入口カトリック案内所（宗像くむなかつ）市。無料。参加予定の方は要事前連絡。電話 090-6420-1783 「キリスト教と文学」読書会グループ 戸上（とがみ）

■長崎

▶聖書セミナー・長崎「聖書の言葉・詩の言葉」6月27日（土）午後2時～4時、活水女子大学大チャペル（長崎市/駐車場なし）。講演①「若者よ、あなたの道を行きなさいーコヘレトの言葉を読むー」（小友くおとも）聡/日本旧約学会会長、聖書協会共同訳旧約担当翻訳者）、講演②「神と人をつなぐ言葉」（岡野絵里子/詩人、聖書協会共同訳日本語担当翻訳者）、対談「聖書の言葉・詩の言葉」小友聡×岡野絵里子。6月24日（水）までにPectix（下記）から要申し込み。無料。電話 03-3567-1988、☒ info2@bible.or.jp 日本聖書協会



番組

ラジオ心のともしび

（朗読・坪井木の実）
6月の放送日と執筆者 1日（月）服部剛（ごう）・2日（火）山本ふみり・3日（水）三宮麻由子・4日（木）中井俊巳・5日（金）越前喜六・6日（土）コリーン・ダルトン・8日（月）村田佳代子・9日（火）森田直樹・10日（水）こいずみゆり・11日（木）山本久美子・12日（金）片柳弘史・13日（土）今井美沙子・15日（月）岸本景子・16日（火）松浦信行・17日（水）岡野絵里子・18日（木）松本准平（じゅんぺい）・19日（金）

竹内修一（おさむ）・20日（土）堀妙子・22日（月）熊本洋（よう）・23日（火）中島貴幸・24日（水）許書寧（きよ・しゅにん）・25日（木）萩原久美子・26日（金）古川利雅・27日（土）古橋昌尚・29日（月）崔友本枝（ちえー・ともえ）・30日（火）林尚志（以上テーマ「多様性」）。

ウェブサイト（下記QRコードでアクセス可）では24時間視聴可能。心のともしび、詳細は電話075-211-9341。

